

“ Not doing, But being ! ”

障害のある幼児を育てる母親に接する機会のあるメル友から、「子育ての不安さ、怖さなどを抱いている母親と話す時のアドバイスを！自分の性格上、お母さんと一緒に落ち込んでしまうことがあるので。」とのメ - ル。

次のように、厚かましくも返信した。

【 「寄り添う」とは、ピタッと側に居ることではありませんからね。話を聴く時も、あまり相手の心に踏み込まないように適度な距離（間）を保つように。その（間）を保つ必要上からも、「人」と「人」の（間）、「人（間）」とも書く。

自分は、意識して（間）を保ちます。共感、共鳴し過ぎて母親の心に無意識の内にズカズカと踏み込むことになってはいけないと思うからです。母親の気持ちを聴いて、なお聴いて、最後に唯一言、そう、正に唯一言、母親が人として向かうべき先を、ちょこっとでも助言できればと思っています。

障害児を育てる母親としての話を聴く前に、一人の女性の気持ちを傾聴する心つもりで聴くように。例えば、障害のある我が子のことを話させる必要がない場合もあります。

例えば、自分が以前に体験した、高齢の祖父と障害児だけの2人で過ごす家庭を訪問したケ - ス。祖父は、日頃から福祉事務所等の行政側の家庭訪問すら拒否していたケ - スです。面談の折、一切孫に関係することは聴かず、世間話を聴きました。そして、最後にちょっと一言だけ「アドバイス」。帰りがけ、「また来いや」と言ってくれました。保健師すら拒否していた祖父が、初めて会うこの自分を受け入れてくれたのです。後日、祖父は保健師と、孫を世話してくれそうな施設見学をするようにもなってくれました。

「聴く」とは「聞く」と異なり、ただ黙って「聴く」ことも意味します。

「聴く」の漢字に「心」があるように、聴きながら相手の心に耳を傾け、思い遣る（相手の本音を推測する）ことです。

寄り添い続けるとは、こういうことです。その時々話を傾聴してもどうなるか、相手のあることだけに、先は解りません。

それだけに、その時々気持ちに寄り添うしか我々にはできないのです。相手の方の心情の整理をお手伝いするだけです。

正に、“ Not doing, But being ! ” 】

（ 2005 年 6 月 24 日 記 ）